

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nskkn.org

PHONE: 03-3433-0987

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



《クリスマスメッセージ》

想像し、考え、行動して

—ひとりではないからクリスマス

司祭 パウロ 宮崎 光

『クリスマスのできごと』という、キリスト教視聴覚センター(AVACO)から2005年に出版された紙芝居、その制作に携わらせていただいたことは、私の人生で最も幸せな時間の一つでした。既に販売終了で再版予定もありませんが、全国の幼稚園や保育園のライブラリーに潜んでいるかもしれません。少年イエスが、「ねえ、お母さん。ぼくの生まれたときのこと教えてくださいませんか？」とマリアにたずねます。「あなたが生まれたときにはね、ふしぎなことが、たくさんたくさんあったの。これからお母さんが話すことを、よく考えながら聞いてくれる？」と、マリアの回想から進行する物語です。

皆さんの教会で、降誕劇の台本を構成するとき、「羊

飼いを先に登場させるか、「東方の博士たち」にするか、ちよつと迷うことはなかったでしょうか。登場順は、聖書には書いてないからです。「飼いや葉桶」を囲んで、羊飼いと



博士たちが鉢合わせる場面も、聖書にはありません。マタイとルカによる福音書の記述を、ほどよくブレンドして構成することが多いのではなないでしょうか。台本にして演じてみると、聖書に書かれていないことを考えなければなりません。行間をどう読むか、どう立ち振る舞うか、どのよ

うな表情や声の調子がよいのか、などを考えなければなりません。でも聖書を読むって、そういうことかなと思いません。想像力を働かせて、解釈して、行動してみても、そうして聖書のできごとや言葉が、今に映し出され、落とし込まれてゆくのです。

イエスさまはきつと、物心ついたときから、自分はどういう生まれ方をしたのか、そのとき何が起こったのかを聞き、調べ、考えたのだから、と私は想像します。母の話から、助けてくれた人たちがいたことを想ったでしょう。同じ頃に死んでいった幼子たちがいたことも知ったでしょう。そして、自分が生きていく責任と使命を考えたでしょう。このように想像することは自由です。想像力は、神からの賜物です。善い想像を続けることで、変革してゆくための道筋を知ることができます。「善い想像」かどうかは、人をつなぐものか、断

つものかで識別できます。

ジョン・レノンの『イマジーン』を想います。忌野清志郎による訳詞は、こう歌います。「天国はない。ただ空があるだけ／国境もない。ただ地球があるだけ／みんながそう思えば、簡単なことさ」と。分け隔てや格差の無い理想の状態、それを「天国」と呼ぶ必要もないならば、国境線を引く必要もないならば、「善い想像」をしてみようよ！という提案。それは「夢かもしれない。でもその夢を見るのは／君ひとりじゃない、仲間がいるのさ」と続けて歌います。「善い想像」をする自由な人は、「ひとりじゃない、仲間がいる」ってこと。それを聖書は、「インマヌエル」。「神は我々と共におられる」(マタイ1:23)という真理の宣言の誕生としました。今年も世界の隅々まで「インマヌエル」。「君ひとりじゃない」という真理の宣言を響かせましょう。

(立教大学チャプレン)

「高橋宏幸主教に聞く」

― まず初めに、主教になられて約1年お働きになって、その率直な感想をお伺いしたいのですが。

主教 他の主教方は分かりませんが、一言で表わすと不安と怖さです。ただそれは、綺麗事に聞こえるかも知れませんが、神さまの命に仕えるチャンスを得たに当たっての感謝や喜びと同時に畏敬の念でもあります。

― 見ているととても忙しく、大変なお働きだと思いますが。

主教 よく「大変でしょう」と言われますが、確かに主教動静を自分で見て、時間的に忙しいと思うことはあります。ただ幸い健康ですので、動くことは苦にはなりません。

― この1年、主教職として大切にしてきたことは何でしょう。

主教 やはり迷うのは1世紀の使徒たちの時代から2千年経ちますので、まったく世の中は変わっています。そうすると当時の主教職と現代の主教職、あるいは最近の主教さんの働きを何代か見ていると、その働きは違うわけ、今私が必要すべき主教職の働きが何かは難しい課題です。ただ信仰というのはペテロやパウロの時代と本質は変

わっていないはずなので、その信仰の原点は大切にしたい

思っています。そのためには祈りと黙想ですが、毎日の仕事をするのに追いつまわられて、また考えなければならぬことも一杯あり、それがおろそかになることが一番怖いですね。

― 神学校の授業では主教職は、使徒の継承者、正統信仰の擁護者であり聖職団の長であるということをお話されたのを覚



えています、その点を、どれだけ出来ているかと問われれば、胸を張れない、というのが正直な気持ちです。

― ただ私はこの1年、委員会や各教会グループ協議会、主教巡杖の時など、直接信徒のお話を聞くことを大事にされてきたという印象があります。それだけでも主教として充分すぎるお働きをされてきたのではないかとお聞きしますが、その中で特に教会で信徒の方のお話を聞き、今の教会が抱えている

一番の問題は何だと思われましたか。

主教 まず問題というと学校にいたものから「問題児」すなわち悪い子、危ない子、やっかいな子、手のかかる子という印象を持たれがちな場面や声をしばしば耳にしてきました。でも「問題児」というのは逆に我々に課題やチャレンジを与えている子で、むしろ先生たちに成長、発展、広がりにつながるようなきっかけを与えてくれる子であると思うようになってきました。

この間、カンタベリー大主教ジャスティン・ウエルビー師が「チャレンジ」という言葉を何度かお使いになって話されているのを聞きましたが、まさに神さまから受けているチャレンジ、問いかけにどう応えていくかではないでしょうか。

― 問題点だけを挙げれば、否定的で後ろ向きになるだけです。今大事なのは、やってみようよという建設的な声です。やる前から駄目と決めてしまったり、やってもいないのに駄目かどうか分かりません、そういう意味でのチャレンジをしてほしい。

― どの教会でも巡回の時に「厚い黒雲の上にも必ず青空がある」と言っていました。でも私たちは雲だけ見ている気が減ったり、落ち込んだりしてしま、でも、その上にちゃんと青空があるのです。

まあ、それはある意味、自分に言い聞かせるために話しているところもあるのですが。

― 確かに今教会はチャレンジ的な精神を失って守りに入り、しばしばマイナス面のほうを考えているような気がします。

主教 日曜学校でのお話のようになりますが、こういうことをしたら、イエスさまがにっこりしてくださる、こういうことをしたら、イエスさまは悲しむだろうということを基準にしたいと思っています。

― 教会の活動は私たちの満足ということもありますが、イエスさまの喜び、神さまの喜びという視点が抜けてしまったら、単なるお楽しみ会で終わってしまいますから。

― 私たちが自分たちだけの満足にならないためにも、チャレンジが必要だということですが、そのためにまず私たちが心がけなければならないことは何でしょうか。

主教 チャレンジをさせない要因は「どうせ無理」「手遅れ」「時代が違う」「社会では通用しない」といったネガティブな言葉です。たとえば日本にはクリスチャンが1%しかいないと言っているのか、1%いると考えるのか、100人のうち1人はいるわけですから、凄

いですがね、ちょっとした発想の転換で顔が上を向くか下を向くかになることは多々あると思います。

― 発想の転換が必要ということですが、どうしても私たちは牧師に頼りがちで、その中で牧師の数も少なくなり、今まで教会でしてきたことも出来なくなっている状況でチャレンジ的なことをするのは難しいと感じています。

主教 忘れてならないのは、キリスト教は信徒運動から始まったということ。聖職ありきではなく、信徒が要になってきたということが大事です。祈り書を見ても教会問答の中に教会は聖職と信徒によって成り立っているという意図が感じられます。そういう意味で聖職はボスではないし、信徒はお客さんではないのです。

― 今こそ依存体質から抜け出し、信徒の主体的な働きが求められるということですね。

主教 そのための教育的プログラムとして、教会問答や聖書の学び、大斎節研修など各教会で行われている活動や各委員会、教区が行っている研修プログラムなどを大切にしたい。

― 信徒の働きということであれば、夏に行われた正義と平和協議会所属団体の報告会に行ったのですが、社会問題、政治問題に教会が関わることに抵抗や

疑問のある人もいますが、個々の活動の報告を聞いていて、何よりも命、神さまからの賜物である命が損なわれる、傷つけられていることに無関心でいられない人が多くいることに心強く感じました。

― 礼拝の中で代祷はありますが、まだまだ実際に関わりを持つという意識は低いように思います。神さまと共に歩むというのはどういうことなのか、もつと教会で考えていく必要があるのではないのでしょうか。

― その点については、現代にあつて教会の宣教とは何でしょう。主教 まず原点は聖書、イエスさまと弟子たちの働き、宣教という言葉は聖書にも出てきますが正直、難しい。ただ聖餐式の最後に「主と共にいきましょう」とある、海外の祈り書には「主を愛し、主に仕えるために…」とちゃんと目的が入っているものもあります。

― 日本社会で起こっている問題、以前は少子高齢化という状況ではなかったです。昔からある貧困の問題にしてもその形が変わって、とても複雑になっています。教会のアプローチの方は以前と違うかもしれません。でも根底にあるものは変わってないのではないかと思います。

― あと各教会を回られて、多分再編

について聞かれたと思うのですが、来年以降どうなされるのでしょうか。

主教 別に白紙に戻ったわけではありませんが、ただ再編という言葉から合併、統廃合、吸収といったイメージ、あるいは閉鎖や教会数を減らすというイメージを持たれもします。聖職が少ない、すぐに10人も20人も増えることはないでしょうが、でも1人もいないわけではない。聖職に相応しい人は必ずいると思います。そういう方を探すのも再編といえるかもしれません。

― 再編というのはサバイバル(生き残り)ではない、むしろリバイバル(生き返り、復活、元気の回復)であり、革新、変革、リニューアルといった言葉が相応しいのではないのでしょうか。

― 竹田主教の時に出された宣教方針は「いと小さき者への奉仕」、それは「いと小さくされた者」でもありますが、ではどのように誰がしたのか、何がしたのか、というテーマも再編と無縁ではないと思います。

― 具体的に私たちはどうすればいいのでしょうか。

主教 一番の再編は、まず私たち自身の信仰のあり方の見直しかなと思います。自分が礼拝でいい気持ちになるのも大事だとは思いますが、そこだけで止まってしまうのは、やはりクエス

ションマークですね。また、原点、なぜこの道に入ったのか、信徒も聖職も、もう一度考えてほしい。

― 再編は組織改革というのがあります。まず信仰の変革、見直しがないと形だけ変わって終わり、それではもつたいたいと思います。

― その信仰の見直しについて、もう少しお聞かせ下さい。

主教 もちろん、今までの信仰が間違っていたから改めなさいではなく、よく私たちは「信仰が足りなくて…」といいますが、信仰は賜物、授けられたものです。それにどう応えているか、たとえば人からお菓子や花をいただいで食べてしまう人、隠しておいて腐らせてしまう人などがいますが、いただいたものをどう使うか、賜物をどう活かすか、そのことを一緒に見直したいです。

― そのために私たちが日常でできることはなんですか。

主教 信仰というのは、そんなに大きく振りかぶらなくていいと思います。イエスさまが大好きであるという思いをもって、優しさ、その眼差しと微笑みから始めて、その人ができることをされたらいいのではないのでしょうか。ただ一人よがりにならないために、教

会問答などを学び直すのは大切です。たくさんヒントが与えられると思います。あとは毎日の祈りと黙想、神さまに問い続けることです。

― 教会の合併についてはどのようにお考えでしょうか。主教 誰かの一言で「一緒にやりなさい」ではなく、そこにいる人たちが、一緒になった方が、もっと豊かになりうる。いろいろ出来るかもしれないと思うことから大事ではないでしょうか。

― 営業成績が悪いから閉じて他の営業所と合併しましょうという発想ではありませんか。― 聖職不足を補うためにも、信徒奉事者が聖別されたパンとブドウ酒を配れるなど、法憲法規の改正、見直しについてのお考えはありますか。

主教 海外では信徒奉事者がご聖体を持って信徒訪問をするなどは当たり前ですから、日本でも考えなければいけない大事なことだと思います。ただ日本では受ける人が聖職からいただかないと有り難くないという声を聞いたことも

ありますので、規則を変えて問題が解決ということにはならないでしょう。

― 昔から議論になっていますが、誰がしたから大事なのか、そこで何がなされているかが大事なのか、神さまの恵みは人間の都合で上がったか下がったりはしないはずなのですか。

― そういう意味でも、私たちの信仰の見直しが必要なかもしれません。

主教 み言葉の礼拝を格下の礼拝であるという声を耳にしたことも以前にはありましたが、礼拝に上も下もありませんから。

― むしろ、み言葉の礼拝の時こそ信徒の方々が主体的に守る礼拝なので、皆で盛り立てようと信徒が増えるようになってほしいです。またもつと工夫して豊かな礼拝ができるようなチャレンジも必要かもしれません。

主教 でも、段々とみ言葉の礼拝に臨む姿勢が積極的になってきたという話も耳にしていますので、可能性は大き

くあると思います。

― 最後にありますが、クリスマス号に掲載しますので、教会がこの機会に発信する大切なメッセージをお聞かせください。

主教 神学的な言い方ではありませんが、私は毎日がクリスマス、毎日がイエスさまを生み出す日だと思っています。

― 大事なのはイエスさまがいつ、すなわち真つ暗闇の中で、どこで、どのような人たちに囲まれてお生まれになったのか、その中に大きな意味、メッセージがあると思いますので、そこをしっかりと聖書から聴きとりたいと思います。それが抜けてしまうと、世間と同じだけのイベントになってしまうのではないのでしょうか。

― そこが本当に大切ですね。今日はどうも有り難うございました。



ナザレから寄贈された式服を着て

教会教育フェスティバル2019・イン・東京

9月15日、16日の2日に渡りNCC主催の第4回教会教育フェスティバルが開催された。全国から集まった参加者は約80名、過去3回は東京、松本、仙台と場所を変え、今回再び東京で開催されることになった。

1日目は午後3時から大久保にある「日本福音ルーテル東京教会」を会場に開会礼拝をもって始められた。

引き続き行われた5つの分科会の内容は、

- ①「ゴスペルを叫ぼう」…ゴスペルを歌の意味、歴史と現状を学びつつ、みんなで大声で歌い賛美の醍醐味を味わう。
- ②「賛美歌をぼーっと歌っていませんか?」…賛美歌を無意識、無自覚に歌わないために、様々なアプローチ、学びを通して新たに「賛美歌」と出会うことを目指す。



③「エキュメニカル教育って何だろう?」…エキュメニカル運動、エキュメニカル教育を「アジアの中の私たち」という視点で、具体的にアジアの教会の動きを知ることによって学ぶ。

④「パステル画の聖句カードを作りましょう」…絵の具ではなくパステルを削り、その粉で色をつける淡く美しいパステル画のカードを作る。

⑤「共に読み、共に分かち合う教会学校」…グループに分かれ、絵本を題材に使い様々なユニークな学びを行う。

分科会のあとは、ともに夕食のお弁当を食べ親睦の時をもち、ルーテル東京教

愛される喜びと愛する喜び

カパティラン事務局

永瀬 良子

水に群がるもの、空の鳥、家畜、地を這うもの、それらを支配する人間。神がこの世を創造されたばかりの世界が広がるバルバラサン。鶏が鳴いて朝が始まり、暗くなったら眠りにつく。

ACWCのリーストコインをきつけに、沢山の方の支



神崎司祭と8月に授けられたビタンガ執事

援によって実現した、多文化共生ホームステイは、フィリピン・ルソン島の聖公会村で行われた。引率したのはペルー、ブラジル、フィリピンにルーツを持つ学生4名。1人ずつ村人の家にホームステイをし、

牧師館とゲストルームのペンキ塗りと堆肥作りの奉仕をした。

ながら多文化共生を学ぶ旅だ。土砂崩れの為に1時間半待機し、村に着いたのは日本を出発してから20時間後だった。

リアクションは様々である。すぐに順応する者もいれば、楽しむまでに時間を要する者もいる。日本とはかけ離れた生活の中で、感じるフラストレーションや不自由さは学生には相当なものだったに違いない。

フィリピンにルーツを持つ大学生。ガイジン、フィリピン人と言われることは日常茶飯事。傷つけられる前に、攻撃してくる相手には全力でぶつかってきた。気が強くて負けず嫌いの割に、繊細で泣き虫な彼女は、時々「どうしたの?」という言葉を待っているような態度をとった。声は掛けなかった。助けてほしいなら、話を聞いてほしいなら、自分で声を上げなければならぬ。「良子さん、聞いてください!」と言葉にできな

と心底ほっとした。

不満やイヤ立ちに身動きできない



くなつた時も、どうしたらいいのかな?と思う?と投げかけた。ああしなさい、こうしなさい、と言うのは簡単だ。ただ、考える力、乗り越えられる力は自分の中にあることを知ってほしかった。

泣いたり、笑ったり、怒ったり、ふてくされながら、見せてくれる本当の姿は、ありえないほど不器用で素直だった。それぞれの表情や感情を受け止め、じつと耳を澄ませることは簡単なことではない。私がそれでも待ち続けるのは、彼ら、彼女たちを心底愛しているからだ。

バルバラサンで学生たちは深く愛され、受け入れられる経験をした。それはいつか誰かを愛する力に代わるかもしれない。愛されることは

会の夕の礼拝に参加して午後8時に終了した。

2日目は場所を日本キリスト教会館・早稲田奉仕園に移し、午前10時から分科会の学びを開始した。

⑥「多様な性(LGBT)と子どもたち」…性についての4つの要素や教育現場の課題などを学び、多様な性を尊重しあえる環境作りについて考える。

⑦「子どもと楽しむゲーム」…教会の中で子どもと大人が一緒に楽しむゲームをする

ことにより、その先にある「キリストの平和」を体験する。

⑧「ミャンマーの文化に出会おう」…18の民族がいるミャンマーの国と文化またキリスト教宣教の歴史について学ぶ。

⑨「自分ごととしての人権」…現代社会のあり方を

気持ちのいいものだ。愛することはそれ以上に、体の底から湧き出るマグマのように熱くて、苦しくて、ど

問うカードゲーム、写真物語の続きを作るなどのワークシヨップを通して、敬遠されがちな人権を自分と結びつける作業を行う。

⑩「潜伏キリシタンについて」…キリスト教伝来と禁令下の状況、またキリシタンが日本に与えた影響について学ぶ。

分科会のあとはミャンマー料理のお弁当を食べ、派遣礼拝をもって閉会となった。

また希望者にはオプショナル・プログラムとして「江戸のキリシタン史跡」と「平和教育資料センター」の見学が用意された。

この会のようなエキュメニカルな学びは、とても有意義で重要だと思いが、聖公会信徒の参加者が少なかったのが気になった。

(広報委員会)

うしようもなく幸せなことなのだ。夕べがあり、朝があった。それは、極めてよかった。

さまざまな動き [3]

ようこそ一粒の麦の会へ



世界祈禱日礼拝 (三光教会)



清里聖アンデレ教会



被献日礼拝 (聖アンデレ主教座聖堂)

東京教区婦人会が80年の歴史を閉じた後、継続すべき大切な働きを担い、どんなでも参加でき、「祈り、学び、奉仕、親睦」の活動グループを新たに発足させてはどうか。という声が上がります。有志が集まって2005年の被献日に「一粒の麦の会」が立ち上がりました。「一粒の麦の会」名称は植田主教の推挙により「教会・キリスト者として関わる」ことが相応しい奉仕活動「教区諸行事への参加」を目指しました。現在は、被献日礼拝(聖アンデレ主教座聖堂)、世界祈禱日礼拝(各教派持ち回りによる)。感謝箱献金(日聖婦)、リーストコイン(AWC)の窓口。春開催の教会巡りバスツアー、春・秋には教会巡りと関連施設訪問を企画し、会員・各教会に案内しお誘いしています。

また、ここ数年、夏季開催の「合同子どもキャンプ、中高生キャンプ、女性フォーラム」に対し、少額ですが資金

支援をしています。日帰りバスツアーは、中部教区・岡谷聖バルナバ教会をはじめ北関東教区4教会、横浜教区6教会へ訪問しました。さらにミニツアー・学びの会で東京教区を中心に14教会を訪問しています。各教会礼拝堂で祈りの時間を過ごし出席者により献金をお奉げしています。

教会に連なる家族が集まる企画が、皆様から賛同を得られ、毎回多くの参加者の方が、次の企画は何、と楽しみみされているようです。

今年、5月に教会巡りバスツアーで「宇都宮聖ヨハネ



宇都宮聖ヨハネ教会

教会・金山昭夫司祭 & 「カトリック松が峰教会・山口一彦神父」に行つて参りました。二つの教会は大谷石建築として国の登録有形文化財に指定されています。丁寧な説明を受けた帰り道「大谷資料館」を見学、その大きさ(広さ)にビックリしたところです。

そして、11月に「丸木美術館・東松山聖ルカ教会」を訪問。「一粒の麦の会」は、2020年2月に誕生15年になります。その間多くの皆さまから応援していただきました。感謝です。

現在、登録会員は125名程、年会費千円を頂いています。登録された方には催しの案内、2月開催の全体会議資料・開催通知を送付しています。今年、被献日・全体会議後はチェロとピアノによるミニコンサートを企画しました。

どうぞ、「一粒の麦の会」をご理解くださり、企画するプログラムに参加下さいますようお願い致します。併せて、会員登録して下さると嬉しい限りです。

世話人代表 足立征三郎

自分のエンディングノートには「フランダーズの犬」を棺に入れるよう書いてあります。少年と犬が貧困と迫害に耐えて懸命に生きようとするも、つぎつぎと不幸に見舞われ、ついにはルーベンスの大作「十字架をたてる」と「十字架からおろす」の二枚の絵の下で力尽き果てる絵本です。母は就寝前にこの本を読み聞かせ、幼い妹と余りの悲話に涙したことを覚えています。

満州の上流階級に生まれた母が死を直前に「我が罪を許したまえ。」と叫んだのは「自分の育った家は残っているが訪問できない」と語っていたように、満州の地で道端に見捨てられた現地の方を無視した自分を許せなかったのでしょうか。

敬虔な母がこの本を選んだのは、「金持ちにならなくていい。」「人の痛みが分かるやさしい人になつて。」と教えたかったからでしょう。

シリーズ 「カトリックの人」

新宣教主事

司祭 太田 信三

東京教区宣教主事を命ぜられました。なぜこの仕事に呼ばれたのか、神さまのみ心はどこにあるのか問い続けていくところに、高橋宏幸主教からいくつかの具体的な取り組み課題が提示されました。内容については、第135(定期)教区教会開演説にてその一部を主教がお話しされていますので、ご一読ください。

さて、その課題のどれか一つに集中するだけでも大仕事、どこから取りかかれば良いのかと途方に暮れつつ、「まずは行動だ」ということには思いつきました。わたしたちの東京教区には、まことに多様な人々が主によって集められています。神さまはわたしたち一人ひとりをこの世に送り出し、「ここにこの人」を配置しています。つまりわたしたち全員に、もれなく神さまからの召命があり、それに応えるための賜物が与えられています。「ここにこの人」を配置された主に信頼し、出か



けて行き、多様な賜物を与えられている人々と出会うなら、与えられた課題に取り組み道が必ずや開かれることと信じます。

東京教区にはまことに多様な人々が主によって集められている、ということを感じるには、ことに礼拝で司式するときです。会衆席を見渡してつくづく、「よくもこれだけの人々を、神さまは同じ所に集めたな」と驚かされます。神さまがいなければ絶対に出会うことがなかった多様な人々が、共に食卓を囲んでいる。洗礼によって家族とされている。この驚くべき光景こそ、人間業では実現し得ない、神の業がこの世界に実現していることを証していると感じるのです。そして、自分の力だけでは実現し得ないその交わりに迎えられることに気付かされる時、自分自身に神さまが働いておられることを実感し、その交わりの

なかで、神の創造された世界の豊かさを、神の国の素晴らしさを知らされます。礼拝の場に実現しているこの驚くべきことは、主日に限らず、教区中の教会、礼拝堂、様々な働きのなかで日々起こっています。東京教区には毎日、神さまのみ業によって、驚きと喜びが満ちみちている！わたしたちが日々このことを感じ、喜びをいただき生きているなら、わたしたちの姿そのものが、世界に向かって神の素晴らしさを証しすることに違いありません。宣教主事としての務めは、ひたすら、この神からの驚きと喜びを教区中の神の家族と分かち合うことなのだろうと感じています。

東京教区に集められた神の家族が互いを思い合い、祝福し合って生きることができましように。日々神さまから驚かされ、喜びをいただいで生きることができましように。そして、わたしたちの姿を通して、この東京の地で、一人でも多くの人がイエスさまと出会うことができましように。

【司祭の1冊】

82年生まれ、キム・ジョン
 チョ・ナムジュ著、齋藤真理子訳
 筑摩書房2019年刊

司祭 池 星熙

この本は30代の女性たちの人生の報告書と呼ばれています。主人公キム・ジョンは1982年に生まれ、現在は33歳、若い女性としてこの時代を活発に生きていく魅力的な主人公です。

夫と娘、ソウル市内で3人暮らし、仕事を持つかたわら育児に励んでいます。しかし、その二つを両立させることが女性にとってもなかなか難しいことかを毎日のように痛感している



この小説を読んだ現代の女性読者の多くが共感し、女性を取り巻く様々な問題を考えるヒューマニズムへと発展しました。作者はこの小説を書いた動機について、「女性の普遍的な悩み」を見せたかったと語っています。韓国ではありふれた「キム・ジョン」というよくある名前を通して、すべての女性たちが家長制の不条理に押しつぶされて暮らす姿を描き、さらにこのようなくとも語っています。「常に慎重かつ正直に選択し、その選択に最善を尽くすキム・ジョンさんにもっと多くの機会と選択肢を与えなければならぬ」と。

活の中で時折、異様な事態が起こり始めます。それはなんとジョンが彼女の母親オ・ミスクの人格を借り、ジョンが今までだれにも話すことができなかったことを夫や夫の実家の家族、そして彼女の周りの取り巻く人々に対し訴えかけるというものでした。その人格は時に代弁者として、時に弁護人として彼女の心の底をせきさららに語るのです。

「口を開ざして生きていく」と「口を開き、それが積もり積もって母親の人格を借り、外へ溢れ出したのだと結論付けます。しかし、借り物のその声はキム・ジョン彼女自身の本当の声とは言えません。キム・ジョンは失くした自分の声を見つめることができるのか？非常に興味深い物語が綴られていきます。

2019年
ふれあいキャンプ

先般の台風ならびに度重なる豪雨等により被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。今回のふれあいキャンプは台風19号が直撃した10月12日の翌日13日から1泊で行いました。出発は毎年、

日曜日の聖餐式が終わってから夕方に出発するので、当日朝まで様子を見ようということになりました。その間、毎年楽しみにしてくれる仲間たちの中には、「キャンプができなかつたらどうしよう」と不安な気持ちで過ごしていた人もいました。

13日当日、無事に決行できる状況となり、予定通り出発しました。茨城県から参加する親子も東京まで高速バスが動くかどうか心配しながらですが、無事にやってきてくれました。

しかし、全員参加とはいかず、中央道が閉鎖してしまい残念ながら参加をあきらめた方もいました。その他、体調を崩されたり、日程が合わなかったりして参加できない方もいました。そのような中で1泊2日の

この小さい集まりの「ふれあいキャンプ」は、初参加の方も加え、一人一人の思いや多くの周りの方のお祈りに支えられ始まりました。

神楽坂の牛込聖バルナバ教会から参加者を乗せたマイクロバスは清瀬聖母教会に立ち寄り、そこからの参加者も加わり会場まで行きました。バスの中からは前日までの台風からは想像ができないほど綺麗な夕焼けを見ることができました。

受付を済ませ、夕食の後、開会の祈りとオリエンテーション、その後はそれぞれ自由にお風呂に入ったり、部屋で休んだり、参加者とおしゃべりしたりして過ごしました。年に1度キャンプでしか会えない仲間と積もる話をしたり、また今年は特にラグビーワールドカップがあり、日本VSスコットランド戦をラウンジのテレビの前に集合、観戦して絆を深めた人達もいました。

2日目は、少し涼しく気持ちの良い朝、屋外で礼拝に与りました。眠気が残る中、聖歌を歌い、聖書のことばに耳を傾け静かな祈りの時間を過

ごしました。

朝食後は、それぞれ温泉や丸木美術館に出かけたり、会場に残って好きな聖歌を歌ったり自由に過ごしました。

午後は全員で分かち合いの時間をもちましたが、多くの参加者が、このキャンプの一



番良いところは「何もしなくてよいこと」ということを感じていました。何もしなくてよい良いキャンプ、それぞれが自由に過ごし、それでいて互いにふれあい、それぞれに心に残る思い出が作られていくのだと感じました。また、今

日も、歌やダンスを披露してくれた仲間もいました。その場でやりたい事をやり、伝えたい事をつたえて、それを聞いて、見て、語って、短い日程のキャンプでしたが、一つ一つが大切な素晴らしい時間となつて一人一人に与えられました。感謝に満ちた1泊2日だったと思います。

キャンプから戻り、新聞やニュースで日一日と台風被害の全貌が見えてきました。たくさんの方が被害にあい、未だ不便な生活を送っている人たちがたくさんいることを心に覚えていきたいと思いま

す。キャンプを決行したことは正しかったのだろうか、と考えることもありましたが、楽しみにしてきた人たちが初めて参加した方の優しい笑顔を思い出すと、実施できて良かったと感じます。心より感謝いたします。

「障がい者」関連活動連絡会 実務委員 ふれあいキャンプ担当 須賀真弓

次回 大斎節号

2020年2月23日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（四十六）

1. クリスマスの切実な願い

2人の姉妹が真剣にサンタさんをお願いごとをしていた。

妹「サンタさん、クリスマスにはお人形をください」

姉「でもその前に、お父さんに仕事をください」

2. 2倍

牧師「年の始めにあたり、今年は信徒数をアップさせたいですね」

信徒「でも、もう2倍にアップしてますよ」

牧師「えっ！」

信徒「アップ・アップしているってことです」

3. 健康診断

牧師が健康診断で不在の時、ある人から教会に電話がかかってきた。

ある人「もしもし、〇〇教会ですか、牧師さんはいらっしゃいますか」

牧師の妻「牧師は、診断です」

ある人「ええっ、い、いったい、いつ死んだんですか？」